



本当の頑張りどころ

遠足も（とりあえず？）無事終了し、あっという間に連休も終わってしまった。次は、体育祭に向けての準備となる。4月が中学生から高校生への新しい生活に慣れるための最初の踏ん張りどころだったとすれば、この5月は、本格的に高校生としての（日比谷生としての）勉強や部活や行事に取り組む、それぞれ本当に本当の踏ん張りどころとなる。勉強も部活も行事も、入学当初の期待と抱負を忘れずにそれぞれ全力で取り組んでほしい。

そんな5月に向けて、連休中はどんな風に過ごしていたのだろう。部活にしっかり打ち込んだ人もいれば、予習のしだめに成功した人（失敗した人…笑）もいるだろう。緊張して過ごした4月の疲れを、家族や中学時代の友だちと過ごす時間の中で、あるいは自分の世界にゆったり浸ることで回復した人もいるかも知れない。とりあえず今日を乗り越えて、この土・日のうちに、次へのステップを踏み出す準備を整えておこう。

*

ところで、3日は憲法記念日だったが、こういう日の新聞は読み応えがある。将来さまざまな分野で日本のリーダーになるだろう諸君には、そして（新入生代表の挨拶にもあったが）間もなく選挙権を手に入れる世代の君たちとしては、ぜひ新聞に親しんでほしいと思う。もちろん忙しい日比谷生にとって、毎日紙面の隅から隅までに目を通すというのは難しいことだろう。しかし、比較的時間に余裕のある土・日や祝日には、自分の興味のある分野だけでもいいから、目を通す習慣を身につけてほしい。そういう積み重ねが、3年後に大きな力になってくれるのである。例え

ば、慶応大学では小論文が出題されるが、小論文で書く内容は、あらかじめ自分の中にため込まれていなくては勝負にならない。小論文に書くべき内容や使用すべき語彙が、新聞を読む中で自然と身についていくのである。

家で新聞を取っていない人は、図書室で読むことができるし、パソコンやスマホで読めるデジタル版なら、それほど大きな家計の負担にはならないから、オトサン、オカサンにおねだりしてもイイかも。

*

5日の朝日新聞「(憲法を考える) 1947年の祈り 国際基督教大学学務副学長・森本あんりさん」から、その一部を引用してみよう。――先生の専門は神学ですね。キリスト者、神学者として憲法を巡る現状をどう考えていますか。

「憲法が制定された当時、1947年の日本では、キリスト教徒も仏教徒も無神論者も、みんなが祈っていました。何百万もの人が死んだのです。屍（しかばね）を前にして、できたのは、祈ることくらいだったろうと思います。広島、長崎に行って慰霊碑の前に立てば、信仰や宗派にかかわらず、だれもが頭（こうべ）を垂れる。それと同じ気持ちで、この憲法に込められていると思います」

「元最高裁判事的那須弘平氏は、日本国憲法を『祈りの書』と呼びました。『懺悔（ざんげ）と謝罪の書』とも言っています。憲法を読むと、『決意し』『念願し』『信ずる』『誓う』と、ふつうの法律文書にはない言葉が出てきます。『永久』『恒久』という言葉もありますが、それは明らかにこの世の（続く）